



東京都立国際高等学校
地理歴史科（地理）教諭

もり かつひろ
森 一広

世界の今を知り、 教室で生かすこと

～若手教員への海外研修のすすめ～

契機となった海外研修

私はこれまで教諭として、エルサルバドル、フィンランド、韓国、シンガポール、マレーシアでの海外研修に参加する機会に恵まれてきました。微力ながら、これまでの経験が教育に携わる皆さまのお役に立てばとの思いから、本稿を寄稿いたします。

中米エルサルバドルでは、ODAの支援現場を訪問し、教育を含む多様な分野で尽力する日本人の姿に深く感銘を受け、国際理解教育への関心が高まりました。フィンランドでは、学術研修休職制度を利用して1年間滞在し、流行し始めていたフィンランド教育の実践に加え、欧州文化が背景にある教育観を肌で感じる事ができ、これらの知見を授業に反映してきました。そして昨今の急激な世界情勢の変化を受け、さらに広い視座を得たいと考え、2024年夏、韓国で開催された「日韓未来パートナーシップ共同基金 日韓高校教師の交流事業」に参加しました。現地の視察、企業訪問、文化体験を通じて、教育を取り巻く社会的・文化的背景を理解する重要性を再認識しました。また、25年夏には、教員研修に参加し、シンガポールおよびマレーシアの現地校、大学、教育

機関にて意見交換を行いました。グローバル化の最前線で展開されている教育の取り組みを学び、今後の教育実践に生かすべく多くの示唆を得ることができました。

教育は社会をデザインする

予測困難で不確実性の高いVUCAの時代において、私は国内外で、「デザイン」の重要性を強く感じています。韓国の名門ハナ高校を訪問した際、受験に直結しない芸術と体育をなぜ重視するのか疑問に思いましたが、その翌年、シンガポールでその背景にある教育哲学を理解することができました。シンガポール政府は、アートなどのノンアカデミックな科目を重視し、既存のマインドセットにとらわれない柔軟な思考力を育むことで、グローバル化と急速な環境変化に対応できる国民の育成を目指しているそうです。

このような潮流は、日本においても着実に広がりつつあります。大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」でした。東京大学が約70年ぶりに新設する学部も「UTokyo College of Design」と名付けられています（27年9月開設予定）。東大は「デザイン」とい



訪問したフィンランドの中学校では、美術の時間に氷の彫刻づくりを行う。

う概念を、単なる芸術表現にとどまらず、社会課題の解決、社会システムの創成、価値の創造といった広義の意味で捉えており、これはまさにVUCA時代に求められる教育の方向性と一致しています。こうした視点は、初等中等教育段階においても不可欠であると考えます。

世界のリアルな教室で

フィンランドでは拍子抜けするほど特別な教育は行われていない印象を受けましたが、いくつか顕著な違いもありました。例えば1クラスあたりの人数は20名前後と少人数で、教師が個々の生徒に丁寧に対応できる環境が整っていました。フィンランドの教育関係者からは、日本のような40名規模のクラスをどのようにマネジメントしているのか不思議がられたことが印象に残っています。

韓国では、受験指導との兼ね合いの中で授業形態を模索している様子が見られました。工業社会を前提とした教育からの脱却を図ろうとする動きは日本と共通しており、「アクティブラーニングの重要性は理解しているが、受験を考えるとそればかりにはできない」と韓国の先生から耳にしたことは印象的でした。日韓独自の視点から世界の課題解決に資する新たな教育の在り方を議論していくことの重要性を感じました。

シンガポールは、多民族国家であり、訪問した小学校の学食では中華料理、マレー料理、インド料理が用意されており、生徒が自由に選んで購入できます。シンガポール国立大学や南洋理工大学では日本料理も提供されており、人気を集めています。また、卒業試験の結果に基づいて進路が決まる「ストーリーミング」制度は、小学校での廃止に続き中学校



午後5時前、フィンランドの高校には生徒も先生もいない。日本のような部活動はなく、スポーツは外部のクラブなどで行い、先生は授業が終われば残業することなく帰宅するという。

でも廃止の方向となり、社会の変化にに応じて改善が進んでいるようです。マレーシアは、隣国シンガポールとは異なり、イスラム圏としての文化的背景が色濃く、訪問した中高一貫校では授業がマレー語で行われており、イスラム教育が重視されている点特徴的でした。

海外研修では、授業見学に加えて、その背景にある社会や文化を学ぶ機会が多く、教育と社会のつながりを深く考える契機となりました。韓国では学校見学よりも企業訪問や文化体験の方が多く、むしろそれが将来の教育の在り方を考察する上で有意義な経験となりました。また、シンガポールに進出している日系企業からは、ジョブ型採用が世界の標準となっている現状を伺い、スキルベースで進学・就職していく傾向が強まっていることをご教示いただきました。

生徒の知見を引き出す

私は、日々の地理の授業で現地での体験を多く交えるようにしています。勤務校は外国籍や帰国生が多く、海外在住経験者が半数以上のクラスもある環境の中で、私の話に対して生徒自身の体験が自然と加わり、双方向的な学びの場が生まれています。

ある国の話題を取り上げると、「私もその国に住んでいました」「その地域ではこんな文化があります」といった補足説明が生徒から出ることも多く、授業が一層深まりを見せます。こうしたやり取りは、海外大学進学を目指す生徒にとってはもちろん、将来のキャリアデザインを考える上でも貴重な機会となっています。

海外研修の意義 若手教員こそぜひ海外へ

インターネットやAIだけでは得られない現地の深い知見を得るためには、海外研修では片言のローカル言語を使って現地の先生方や関係者とあいさつを交わし、ちょっとした立ち話をする中で得られる情報が大変貴重です。その国の言語で話しかけることは、打ち解けた雰囲気をつくり交流を深めるために大変役立ちます。フィンランドではフィンランド語で、シンガポールではシンガドリッシュで声をかけたことで多くの知見を得られたと思っています。

また、海外研修で行動を共にする日本の先生方との交流も大きな財産です。普段出会う機会の少ない中学校の先生方、国立や私立学校の先生方、指導主事、副校長、校長といった異なる立場の方々や勤務先の

現状や教育課題について、立場を超えて朝から晩まで情報交換した時間は教育の本質を見つめ直す貴重な機会となりました。

海外研修に参加される先生方も、志が高く、教育に対する熱意を持つ方ばかりです。管理職の皆さまにおかれましては、所属する若手の先生方を海外研修に派遣し、研修や議論を通じて、視野を広げ、教育観を深める機会を提供していただきたいと強く思います。現地地で得た知見を生かした授業や指導が、よりよい世界をつくる「デザイン」につながっていく実感は、若手教員にとって大きなやりがいとなるはずです。そのような先生の姿を見た児童生徒が、将来教職を志すような好循環が生まれれば、教育を通じた豊かな社会形成にもつながっていくと信じています。

Pesäpallon perässä Tokiosta Hiukkaan



筆者が研修で滞した地方の新聞に掲載された記事(部分)。現地はフィンランド式野球「ペサパロ」が盛んで、筆者が高校野球監督経験者だったことから、日本の野球との比較などの取材を受けた。